



Development and sex differences in social communication from primary school to adolescence : Formulation of an advanced test of theory of mind, Japanese version

伊藤, 斉子

(Degree)

博士 (保健学)

(Date of Degree)

2004-03-31

(Date of Publication)

2009-04-10

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲3135

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1003135>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



【 193 】

氏 名・(本 籍) 伊藤 斉子 (北海道)

博士の専攻分野の名称 博士(保健学)

学 位 記 番 号 博い第2号

学位授与の 要 件 学位規則第4条第1項該当

学位授与の 日 付 平成16年3月31日

【 学位論文題目 】

Development and sex differences in social communication
from primary school to adolescence:Formulation of an
advanced test of theory of mind, japanese version.
(学齢期から思春期にかけてのソーシャル・コミュニケーション
の発達と性差：日本版心の高次テスト作成)

審 査 委 員

主 査	教 授	金子	翼
	教 授	高田	哲
	教 授	古川	宏
	助教授	幸福	秀和

論文内容の要旨

専攻領域 理学・作業療法領域

専攻分野 基礎作業療法学

氏 名 伊藤 育子

論文題目

Development and sex differences in social communication from primary school to adolescence: Formulation of an advanced test of theory of mind, Japanese version

(学齢期から思春期にかけてのソーシャル・コミュニケーションの発達と性差: 日本版心の理論の高次テスト作成)

I 緒言

高機能自閉症(HFA)やアスペルガー障害(AS)児は、冗談や皮肉などの言外の意味を理解することが苦手である。しかし日本においては、このようなソーシャル・コミュニケーションの評価法は開発されていない。

心の理論の高次テスト(Happé)は、言外の意味の理解について調べるために開発されたもので、最近、各国で注目されている。しかし、海外においても、学齢期や成人における「他者の心の理解」の発達や性差を示す標準的な資料はほとんどない。

本研究の目的は、日本文化に適合するように新たに作り直した心の理論の高次テストを用いて、学齢期から思春期にかけてのソーシャル・コミュニケーションの発達について、1)年齢別通過率、2)性差を検討することである。

II 対象と方法

文章によるインフォームド・コンセントを得た兵庫県下の小学校2校と中学校1校の通常学級に在籍する全児童1204名(男児597名、女児607名)及び青年55名(24.5±6.2歳)を対象とした。ワークブックに編集した10課題(嘘: 母親の花瓶を割った少年が「犬がやった」と言う話、罪のない嘘: 弟が遊びに行ったので一人で祖父の見舞いに来た兄が「弟は病気で来られなくなったの」と言う話、直喩: 片づけもせずに遊びに出かけた兄弟の部屋で母親が「嵐が通ったあとのようね」と言う話、隠喩: 食事のあと横になった少女に祖母が「すぐに寝たら牛になるよ」と言う話、ふり: 妹のケ

ーキをつまみ食いした姉が「知らないよ」と言う話、見かけと現実: 上げ底の飴の瓶をお店の人が「たくさん入っていますよ」と言う話、反対の感情: 腹痛の友達の荷物も背負った少年が「ぜんぜん重くないヨ」と言う話、冗談: 100円の品物を買った少女にお店の人が「はい100万円ね」と言う話、皮肉: 水遊びで泥だらけになった少年に母親が「きれいな洋服を着ているわね」と言う話、説得: 子犬が生まれて困ったので友達のところに子犬を連れてきた少女が「飼ってくれないと両親に『捨ててきなさい』と言われているの」と言う話。)を各対象者に配布し、学級ごとに実施した。

「どうして登場人物はそう言ったのですか?」という質問への回答(自由記述)についてKJ法を用いて分類し、質問の意図に適合した回答が占める割合を通過率として学年・男女別に算出した。通過率曲線を回帰分析で、学年差及び性差を χ^2 乗検定で分析した。さらに50%および80%通過時期を検討した。

III 結果

1. 青年の通過率は、全課題を通して90-100%であり、課題の妥当性が確認された。
2. 全課題において、年齢とともに通過率は上昇した。
3. 話の意図によって理解可能時期が異なっていた。すなわち、嘘・直喩・ふり・見かけと現実・反対の感情の理解の50%通過時期は小1であったが、罪のない嘘・隠喩の50%通過時期は小2で、冗談・説得は小4、皮肉が小5であった。
4. 男女による差を検討したところ、見かけと現実・罪のない嘘・隠喩・冗談・説得の5課題で、女兒の方が1年ほど早く理解可能になった。
5. 皮肉と説得の2課題については、男性は中3でも80%を超えなかった。青年においても、説得の通過率については女性の方が有意に高かった。

IV 考察とまとめ

健常児で冗談・皮肉・説得が理解できるようになる小4-5年の時期は、HFA/AS児で対人関係が悪化する傾向がある。この悪化はソーシャル・コミュニケーションの発達と関連する可能性が推察された。本研究で認めた性差は、言語発達(Macoby), E-S理論(Baron-Cohen),あるいは社会脳(Brothers)の観点で説明可能かもしれない。

対人関係の問題を取り扱う場合には、年齢や性差によりソーシャル・コミュニケーションの発達に違いがあることを考慮して介入する必要があることが明らかになった。

今後の課題は、1) HFA/AS群との比較を通じて、これらの課題のうち障害判別に有用な課題を検討すること、2) 回答分類で得た回答内容を参考に選択肢を作成し、テストを改変(コンピュータ・ソフト)することである。

指導教官 金子 翼 教授

(別紙1)

論文審査の結果の要旨

氏 名	伊藤 斉子		
論文題目	Development and sex differences in social communication from primary school to adolescence Formulatinon of an advanced test of theory of mind, japanese version (学齢期から思春期にかけてのソーシャル・コミュニケーションの発達と性差：日本版心の高次テスト作成)		
審査委員	区 分	職 名	氏 名
	主 査	教授	金 子 翼
	副 査	教授	高 田 哲
	副 査	教授	吉 川 宏
	副 査	助教授	茅 福 寿和
	副 査		
印			
要 旨			
本研究は、高機能自閉症やアスペルガー障害児におけるソーシャル・コミュニケーション障害、特に冗談や皮肉などの言外の意味を理解することの遅れについて明らかにする目的で実施されたものである。研究方法は、Happe による心の理論の高次テストを日本文化に適合するように新たに作成し、このテストを小・中学生 1204 名と青年 55 名に実施し、年齢別通過率、性差について検討した。その結果、全課題とも年齢によって通過率が上昇すること、話の意図によって理解可能時期が異なること、5 課題において女兒の方が 1 年ほど早く理解可能になること、などを明らかにしたものであり、今後の人間発達学、教育学、小児リハビリテーション学に関する重要な知見を得たものとして価値ある集積であると認める。 よって、学位申請者の伊藤斉子は、博士（保健学）の学位を得る資格があると認める。			